

大田市埋蔵文化財調査報告 5

石見銀山遺跡発掘調査概要 1

1 9 8 4

島根県大田市教育委員会

大田市埋蔵文化財調査報告 5

石見銀山遺跡発掘調査概要 1

1 9 8 4

島根県大田市教育委員会

例 言

1. 本書は昭和 58 年度国県補助事業として島根県大田市教育委員会が実施した、石見銀山遺跡発掘調査の概報である。

2. 調査体制は下記のとおりである。

●島根県大田市教育委員会

田中三郎（教育長）

瓜坂正昭（社会教育課長）

宇谷良平（同 補佐）

松村淳真（体育文化係長）

大国晴雄（同主事・調査担当者）

稲田 信（調査補助員）

●調査指導・協力

・文化庁

岡本東三（記念物課文化財調査官）

・島根県教育委員会文化課

長谷川 清（主幹）

ト部吉博（主事）

鳥谷芳雄（主事）

・島根県立博物館

村上 勇（学芸員）

・田中圭一（佐渡高等学校教諭）

3. 本書の執筆・編集は上記の大国、稲田がこれを行い、関係各位の協力を得た。

4. 収録した地図・実測図は大田市教育委員会により作成したものを主とし、一部については関係機関作成のものを利用した。

5. 出土遺物及び作成した図面・写真は、大田市教育委員会にて保管している。

6. 実測図等に示した方位はいずれも磁北である。

目 次

| | |
|---------------------|-----|
| I. 調査の概要・経過 | 頁 1 |
| II. 石見銀山遺跡の概要 | 3 |
| III. 調査の概要 | 7 |
| IV. 出土遺物 | 17 |

図 版 目 次

| | | |
|------|-------------------|-----|
| 図 1 | 石見銀山遺跡位置図 | 頁 2 |
| 図 2 | 石見銀山遺跡番所跡・公園地区位置図 | 8 |
| 図 3 | 石見銀山遺跡代官所南地区位置図 | 8 |
| 図 4 | 番所跡地区地形測量図 | 9 |
| 図 5 | 番所跡地区土層図 | 10 |
| 図 6 | 代官所南地区地形測量図 | 11 |
| 図 7 | 代官所南地区遺構実測図 | 12 |
| 図 8 | 代官所南地区石列正面実測図 | 13 |
| 図 9 | 代官所南地区石列実測図 | 13 |
| 図 10 | 代官所南地区土層図(1) | 14 |
| 図 11 | 代官所南地区土層図(2) | 15 |
| 図 12 | 公園地区地形測量図 | 16 |
| 図 13 | 公園地区石列実測図 | 17 |

I 調査の概要・経過

石見銀山遺跡は昭和44年にその一部が史跡指定を受け、代官所跡と鉱道跡である間歩を中心に整備や活用が進められ、その知名度も序々に上昇し、年間来訪者数も15万人に迫るまでとなった。

埋蔵文化財としての石見銀山遺跡はこれまで、個々に指定された山吹城跡や間歩などがあったが、いずれも大まかな様相や写真などによる整理が中心となり、近世考古学の分野からはとりあげるに至らず、また近世考古学自体も未だ著についていなかった。

昭和53年から調査と整備を計画した山吹城跡は、戦国期における石見銀山争奪の主たる舞台であるが、この計画の前提となる石見銀山遺跡の整備計画の策定がまず先決の課題と考えられた。これは昭和53年に島根県文化財保護審議会によって県教委へ答申された「島根県文化財保護行政長期計画について」の中で求められている文化財集中地区における整備計画の樹立にも通じるものである。

昭和58年度から開始した石見銀山遺跡総合整備計画策定事業は4ケ年計画で石見銀山遺跡の整備にかかわる基本構想、基本計画の策定をめざし、調査と策定委員会を行うものである。この調査の初年度に計画・実施することとなった発掘調査は、もとより遺跡全体の発掘調査を目途としたものではなく、この遺跡がどの程度の残存状況であるか、また主たる遺跡についてどの程度の復原が可能であるかの把握を試みようとするものである。

今年度の調査対象地は追加分も含めて、3ヶ所を選定し、2ヶ所については発掘調査を実施、史跡指定地内については国土座標系への取付、地形測量を実施したところである。

発掘調査を実施した蔵泉寺口番所跡推定地は銀山（鉱山）と大森（町方）を区分し、銀山への出入を監視する番所であり、隣接地には刑場もあったと考えられる場所である。当時は銀山の周囲には柵がめぐらされていたことも絵図にみえ、銀山の入口部分として、遺構の検出されるのを期待したが、今回は十分な遺構をつかめなかった。南側の隣接地を含め、今後の調査が必要であろう。

もう一つの調査地である代官所南地区は代官所関連の米蔵、代官私邸等の存在が予測される場所であったが、今回は小規模な建物跡と代官所関連建物の礎石とも考えうる石材を検出したにとどまった。周辺の調査が今後の課題である。

山吹城跡の入口部分にあたる場所には字名で「下屋敷」等がみえ、調査、整備を前提とした基準杭の設置・地形測量を実施し、今後に備えたものである。

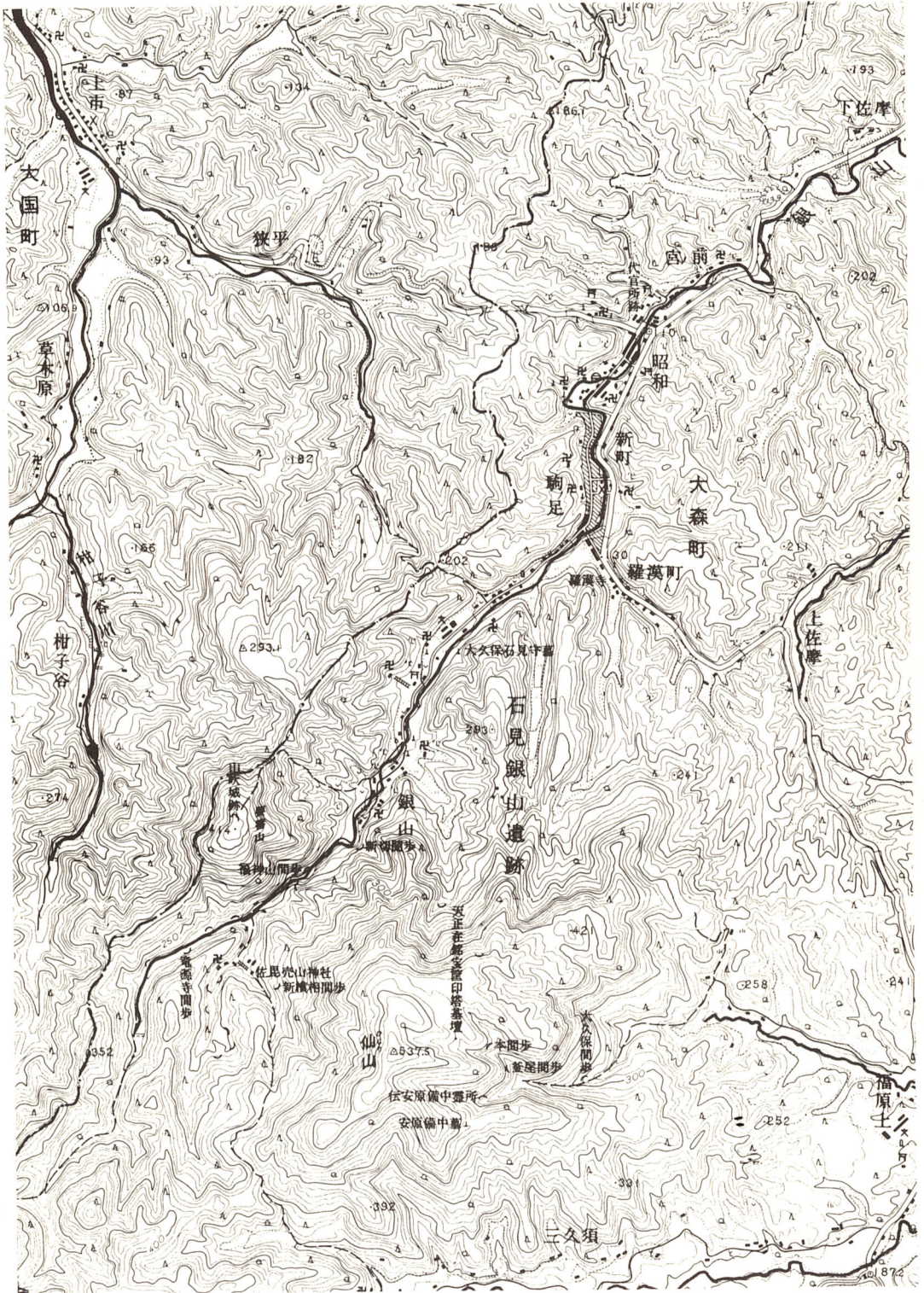


図1. 石見銀山遺跡位置図 (1/25,000)

Ⅱ 石見銀山遺跡の概要

1. 銀山史について

石見銀山が発見されたのは鎌倉時代末期の延慶2年（1309年）といわれ、本格的に発掘が開始されたのは室町時代中期の大永6年（1526年）である。

石見銀山に最初目をつけた武将は周防の国（山口県）の大内義興。そのころ、銀山仙の山は自然銀（露頭銀）が大変豊富で、大内氏は沢山の掘子大工を連れて入山し、産銀に励んだ。そのころから、銀山の昆布山谷には煮売屋や居酒屋やめし屋などが立ちならび、次第に鉾山町が形成された。享祿4年（1531年）銀山の盛況ぶりを見た邑智郡川本、温湯城々主小笠原長隆は兵3,500を發し、突然銀山を攻撃して、掌中に収めたが、3年を経て、大内氏は再びこれをうばい返し、やがて出雲の尼子氏がこれに加わり、銀山争奪戦は永祿5年の毛利氏の完全占領まで約30年間続く。

天文2年（1533年）8月には筑前（福岡県）博多から禅僧宗丹慶寿がやって来て、灰吹きによる精練技術を伝え、銀山七谷には家数が13,000軒もあったと古事に記されているので、人口は5万～6万人位は居たのではなかろうかと推測される。

天文8年（1539年）8月に昆布山谷にてっぽう水が出て1,300人が流された。そのころ、大内氏に納める貢銀（税金）は年間500枚位で、石東海岸へは明の貿易船がひしめき、銀山の枋畑には長崎から唐人が来たといわれる。

銀が盛んに掘り出されたのは大永6年から天正の頃まで約60年間で、最盛期の天文の頃には年産2,000貫以上の銀が産出され外国へ輸出されていたのではないかと推察される。

その頃、中央では秀吉が天下統一を進め、銀山は秀吉と毛利氏との共同管理に移行し、文祿2年（1593年）の朝鮮出兵時には、秀吉は石見銀を博多へ運んで貨幣に鑄造して文祿丁銀（ゆずり葉銀）を造り兵糧を仕入れて戦費に充てた。

慶長5年（1600年）関ヶ原の戦いで徳川方が勝つと家康は石見銀山へ上使を派遣して翌6年から大久保長安を駐在させて銀山の管理奉行に当らせた。その頃、備中国（岡山県）から安原伝兵衛という山師が来山していたが、銀山の清水寺の本尊十一面観音を深く信仰して釜屋間歩の鉾脈を発見、おびたしい銀を掘出して貢銀3600貢も運上（納入）し、家康から辻ヶ花染丁字文胸服（国指定重要文化財）一領と扇一柄（市指定文化財）を拝領した。

その頃、石見銀山は最盛期で「銀山旧記」(江戸時代にまとめたもの)には「慶長・寛永の頃、人口二十万人、寺院百ヶ寺、一日に米を費やすこと千五百石…」とか「家数二万六千余…」などと記されている。人口20万人は少し誇張としても家数26,000軒に平均家族人数3人から5人を見て乗ずると凡そ8万人から13万入位の数になる。この頃の産銀量も8,000貫から10,000貫位はあったであろうと推定される。

江戸時代中期からは産銀が著しく減少して、延宝年間(1673年～1680年)に入ると奉行は代官に替り、産銀も年産400貫位に下り、それから次第に減少して、幕末の安政6年(1859年)には、わずか30貫にとどまった。代官所は頭を痛め山師たちへ資金を貸付けて増産をはかったが、はたせなかった。

天領(幕府の直轄領地)時代265年間には奉行、代官、預り(他藩の大名が兼務する)が59人も入れ替り、石見銀山御料内150ヶ村4万8千余石の統治と銀山の管理を行った。その中でもシルバーラッシュを起した初代奉行大久保石見守長安と享保17年(1732年)の大飢饉を救った19代目の代官井戸平左衛門は有名である。

慶応2年(1866年)には、戊辰戦争が起り長州(山口の毛利藩)軍は石見へ進撃し、益田の七尾城、浜田城を落して銀山御料内へ侵入した。最後の代官鍋田三郎右衛門は家来を引き連れ備後国(広島県)の上下陣屋へ逃亡、長かった徳川時代(天領時代)の幕を閉じた。

長州軍が大森へ到着したのは慶応2年7月24日で、その頃、米の相場(値段)が急に上り、大田地方のあちこちで百姓一揆が起き、長州軍の手でまもなく鎮圧された。

石見銀山は266年振りで再び毛利氏の管理にゆだねられ明治2年の版籍奉還まで毛利大膳太夫の名において、長州藩士、高州庄吉と同藩士武田伊三清が代官心得として旧銀山料の管理と統治の任に当たった。

明治政府が誕生後、明治2年8月から約半年間大森県が置かれ、それが翌3年からは浜田県と改められ、翌9年には隠岐・松江・浜田・大森を含めた現在の島根県がつくられた。

この間の銀の生産は慶応2～3年には年産20貫～30貫という低さで明治には大森町の有志が一鉾区を掘ったがおもわしくなく、明治5年の浜田沖地震では銀坑道のほとんどが崩壊した。明治20年になって大阪の藤田組の経営となり、それが同和興業(株)に受け継がれて、明治25年～29年頃までは、一時的に産銀量が年平均540貫と増加した。

大正6年の銀山(仁万町大国の永久坑)の従業員は700余人いたが、坑道の地下水が多量にわき出るため、採算が合わなくなって遂に大正12年3月に閉山された。

2. 石見銀山に関連する遺跡について

(1) 争奪史関係遺跡

まず、山吹城跡があげられる。城跡は大森町字古城山ホ271番地にあり、現在史跡指定されている。城跡の構造は現況でみると、頂上部に主郭（ $33\text{ m} \times 52\text{ m}$ ）と北に4つの郭、南に3つの郭を有し、城門部などに若干の石垣を残し、主郭の南側には空壕を設けている。周辺には出丸状の平坦面もあるが精査されていないため詳細は不明である。

山麓には長大な石垣が2所にわたって認められ字名から「下屋敷」、「焰硝蔵廻り」がみえ、城跡に関連する遺構の所在が想定される。

次に山吹城跡の南西2kmには矢滝城跡がある。これ以外の城跡も含め、現時点ではその内部構造については不明な点が多い。

(2) 銀山関係

史跡指定された間歩は大久保間歩・釜屋間歩・本間歩・竜源寺間歩・福神山間歩・新初間歩・新助相間歩の7坑道であるが、文政6(1823)年には休止坑も含め279坑を数えている。主要な間歩については坑道口部分の略測がなされているが、他についてはまったく未整理の状態である。その内3坑道には坑道入口に四ツ留を復原している。他に四ツ留役所(坑口)、精錬所などの銀生産関連遺跡の存在も予測されるが、いずれも不明な点が多く、今後の分布調査等に待つところが大きい。

(3) 信仰遺跡

1) 墓地・供養塔など

現在知られているものは江戸期にその大半があり、それ以前のものとしては史跡指定されている天正在銘宝篋印塔基壇が唯一確認されている。江戸期の墓地としては史跡安原備中墓・伝安原備中霊所・市指定史跡奉行竹村丹後守墓・同代官鈴木八右衛門墓・同代官會田伊右衛門墓・同代官前澤藤十郎墓・同代官森八左衛門墓・同代官関忠太夫供養塔・同代官阿久澤修理墓・同代官浅岡四郎墓・同代官川崎平右衛門定孝供養塔・同銀山付役人吉岡出雲墓・同銀山付役人宗岡佐渡墓が確認される。他にも大森町内の寺院には近世墓が多数残されている。また、県指定の五百羅漢坐像群の北側におかれた宝篋印塔や一石五輪塔、一石宝篋印塔など多くの石造遺物がある。

2) 寺院跡・神社

銀山百ヶ寺と称される寺院のうち、大森町内に現存するのは13寺で、寺院跡が認めら

れる場所もいくつかある。

神社は延喜式内社の城上神社と毛利元就を祀る豊栄神社、銀山の守護神社としての佐毘売山神社があり、豊栄神社境内には江戸末の石造遺物群がある。

3) 五百羅漢坐像群

県指定の際に基本的な台帳と銘文の分類がなされているが、今後、当地方の石工集団の動きや銀採掘の技術ともあわせ、調査が必要なものである。

4) 銀山支配関連遺跡

代官所は現在表門と門長屋を残すのみで、代官所内部の構造や関連する建物の配置・構造は推測の余地を出ない。ただ大まかな位置関係は地方文書に残されている。

番所跡としては大森町と銀山を仕切る柵の通り道に設けられた蔵泉寺口番所、湯泉津との境におかれた坂根口番所跡がある。

他には刑場跡・処刑後の遺骸を入れた千人壺・間歩の入口に設けられた四ツ留役所跡などがある。

5) 大森の町並関連遺跡

大森の町並の中には県指定史跡の建物が7件、銀山に1件あり、この建物の構造については既に調査されているが、その付属建物や周囲の構造については不明の部分も多く、庭などについて調査が必要である。さらに寛政12(1800)年の大火以前の町並の遺構についても今後の調査により検出される可能性も残されている。この寛政大火により焼失した家屋は武家61軒、社家4軒、寺院5ヶ所、町家219軒、土蔵26ヶ所と記録がある。

6) 銀山の家並

銀山地区に元来存在した山稼ぎ人の居住地については遺跡として今後の調査を待つところであるが、佐比毘山神社周辺の平坦地や、銀山七谷といわれる仙の山周辺などに建物の存在を予測させる。

7) その他

銀を湯泉津港や赤名経由で尾道へ輸送した銀山街道については降露坂を中心としていくらかの部分が残っているが、江戸期の道路敷についても検出される可能性がある。

8) 慶長期の遺構について

山吹城跡北側の「下屋敷」などの北側には「魚店」「上市場」の地名が残され、銀山付役人吉岡出雲関連文書にはこの慶長期の銀山がよくしるされている。初期の鉾山町の残されたこの休谷周辺の調査は当面とりあげられるべき課題である。

Ⅲ 調査の概要

1. 番所跡地区

計画：調査地区として、従来より番所跡・刑場跡との伝承の残る約300m²をまず計画した。古文書・古図面等の資料、平坦面の少い大森では比較的広い平坦面が続くこと、周囲の水田面より一段低く、刑場等の可能性が強いという3点の理由で今回の調査地区を設定した。現在は水田・畑になっており、南側には石ヶ坪正雄宅、北西側に地藏堂、南西側は一段高くなった平坦面に続く。

調査方法：本遺跡の発掘調査を実施するにあたり、調査計画の立案および検出遺構の検討のため、調査地区周辺の地形測量図の作成をおこなう。そこで市道銀山線銀山地区道路改良工事に伴う測量図を利用して1/300の地形測量図を作成し、調査予定地区内約300m²に4m間隔の基準点網を張った。北西から南東に向けて4m毎にA～D、北東から南西にかけて1～10とし、A1-A10の基準線はN60°Eになる。グリッド番号は4つの坑のうち最も若いものの記号をもってそのグリッドの番号とする。

調査の経過：今回の調査では15のグリッドを発掘したが、A1・A2・A3・A4・A5・B2・B3・B4は耕作土を取り除くにとどまっている。B5・B9・C6・C7・C8・C9は耕作土、グライ土層の二層を発掘し、C6・C7はさらに掘り進めていったが、地山にまでは至らなかった。

遺構：調査範囲内では、こぶし大から人頭大の石が2層目にあたる青灰色土層から多く検出されているが、建物跡とみられる遺構は検出されていない。また、性格は不明であるが、磁器・石をつき固めた整地面がC7・C8・C9で見られる。

遺物：遺物は瓦片、陶磁器片が各層から検出されているが、完形品は無く、約3cmの破片になって出土する。時期は16世紀末から17世紀初頭にわたる。B7より鉄砲の玉と思われる直径約1cmの鉛玉、C6より直径約50cmの曲物が検出されている。

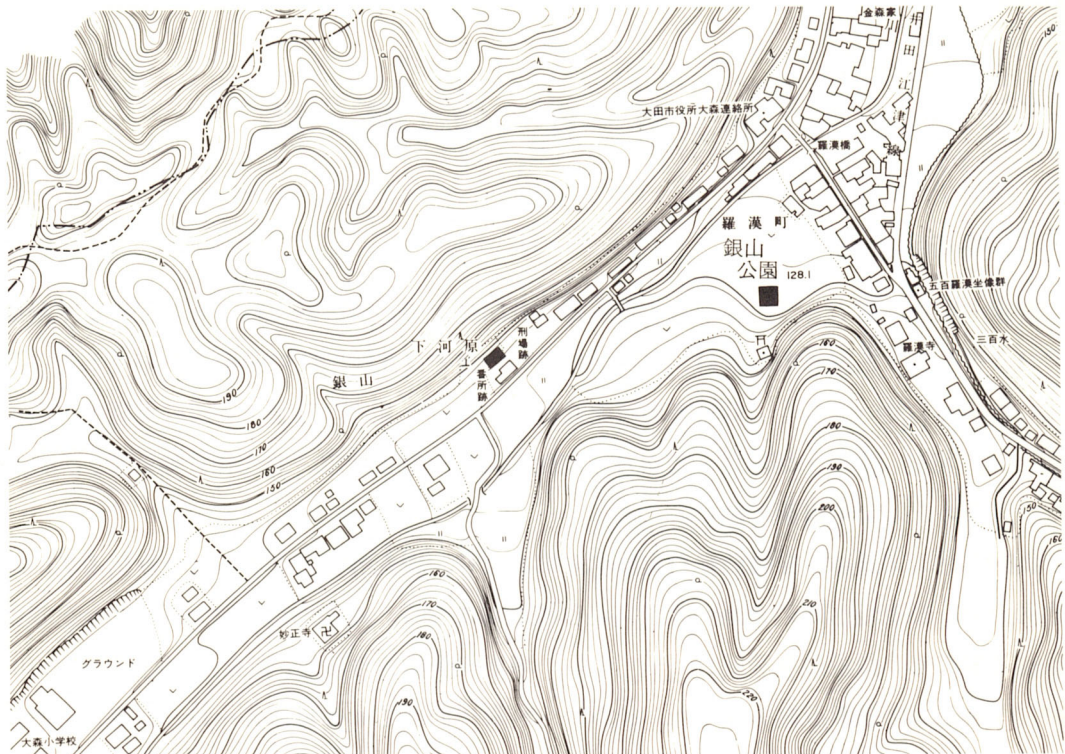


図2. 石見銀山遺跡番所跡、公園地区位置図 (1/5,000)

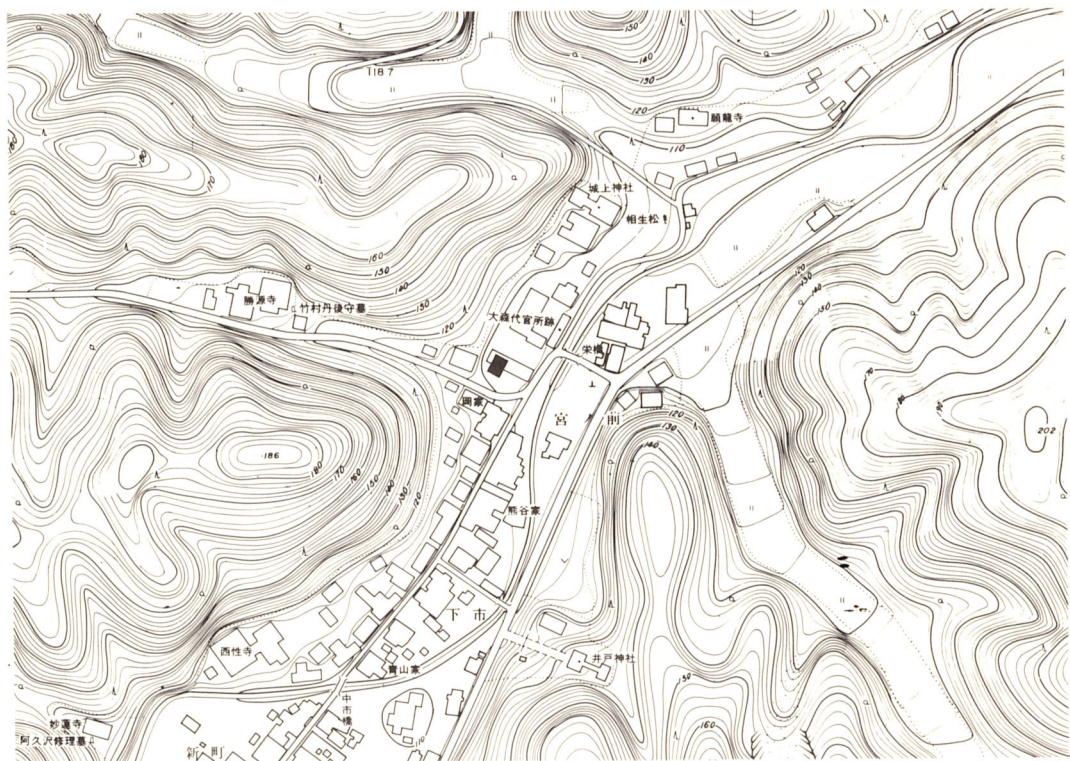


図3. 石見銀山遺跡代官所南地区位置図 (1/5,000)

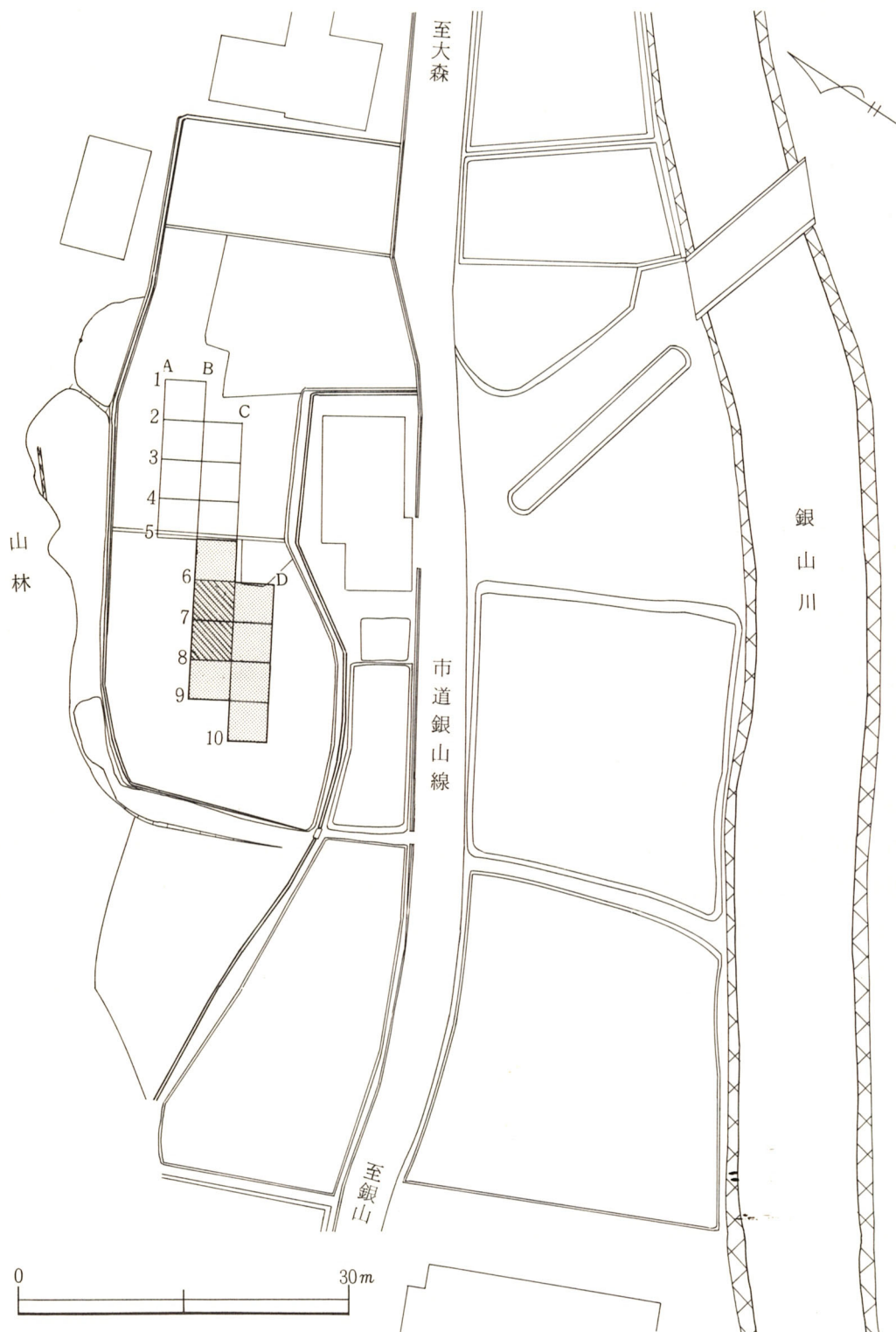


図4. 番所跡地区地形測量図 (1/600)

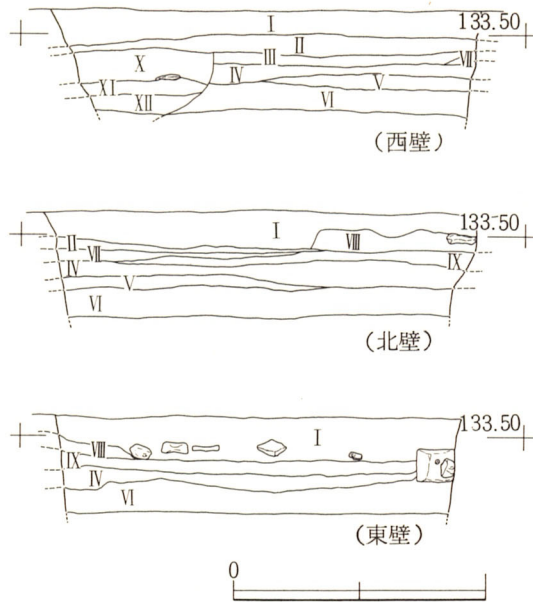


図5. 番所跡地区土層図 (B6区)

- I 耕作土
- II 青灰色土
- III 青灰色土 (砂質)
- IV 暗青灰色土
- V 青灰色 (茶色土混)
- VI 暗黄灰色土
- VII 明褐色土
- VIII 暗茶色土
- IX 黒茶色土

2. 代官所南地区

計画：調査地区は代官所の南に隣接し、古文書・古図面等により代官の私邸跡、米蔵跡の存在が考えられる場所である。近代に入り、大森小学校の校庭として利用され、昭和の初年頃には県道大森～仁摩線の改良工事に伴い、約50cmほど埋立てがなされている。調査の直前には、竹工場として利用され、後空地となっていた。南西側には県指定史跡地役人遺宅岡家、南東には県道を間にはさんで銀山川が位置する。

調査方法：代官所跡、県指定史跡地役人遺宅岡家を含む1/300の地形測量図を作成した。調査は初め、4×4mの試掘を行ったが、自然石の石列遺構が検出されたため、調査地区を約160m²に広げ、本格的な発掘調査に入った。そこで4mごとに基準点網を張り南東方向へ4mごとにA～E、南東方向へ4mごとに1～5とし、A1～A5の基準線はN30°Eとする。グリッド番号は4つの杭のうち最も若いものの記号をもってそのグリッドの番号とする。

調査経過：最初の試掘地であるB1より石列のかどが検出されたため、調査地区を広げて160m²を発掘することになった。発掘は昭和初年に埋め立てられた50cmの土石を取り除くことから始まった。この表土をはぐと約20cmの褐色土層が調査地区全面に広がっており、その下に明確な境をもつ褐色土層（ブロックを含む）が広がっている。主な遺構はこの二層目の褐色土層（ブロックを含む）から検出されている。

石列遺構：A3より自然石を使用した石列が検出された。（図9）これは一部積み重ねた部分が見られるが、大部分は一段の簡単な作りである。石の大きさも10cm～20cm程度の小さな自然石を使用しており、建物の礎石とは考え難い。C1・C2・C3からは切

石使用の石列が検出されており、石列の残存長は約6 mを測るが、両かどは検出されず後世に破壊されたものと思われる。石材はすべて砂岩質で、邇摩で産する福光石の可能性が強く、厚さ約30 cm、幅20~30 cm、長さ20~50 cmに切石加工をしている。石列の裏側には黄色ブロックを含む黄褐色土がつめられており、裏込と考えられる。この2つの石列はその前後関係を明確にすることはできなかったが、出土遺物よりほぼ同時期のものと考えられ、石列の方向はいずれもほぼ代官所の門長屋に平行している。また石列状になっていないがC3の東側より厚さ約50 cmで切石加工の石材が数個、攪乱された状態で出土している。

土壌：B2より65×85 cm、深さ20 cmの土壌が検出されている。これは二層目の褐色土層（ブロック含む）に掘り込まれたもので、中に10 cm程の自然石2個、瓦片が認められ、黄色ブロックを含む砂で満たされていた。

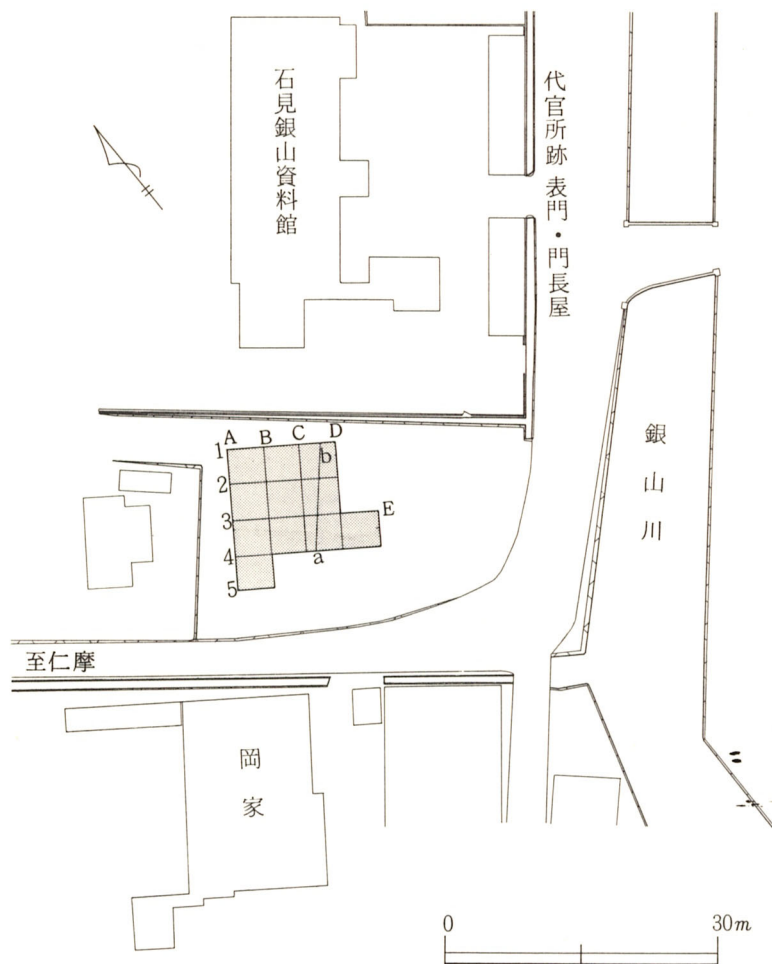


図6. 代官所南地区地形測量図(1/600)

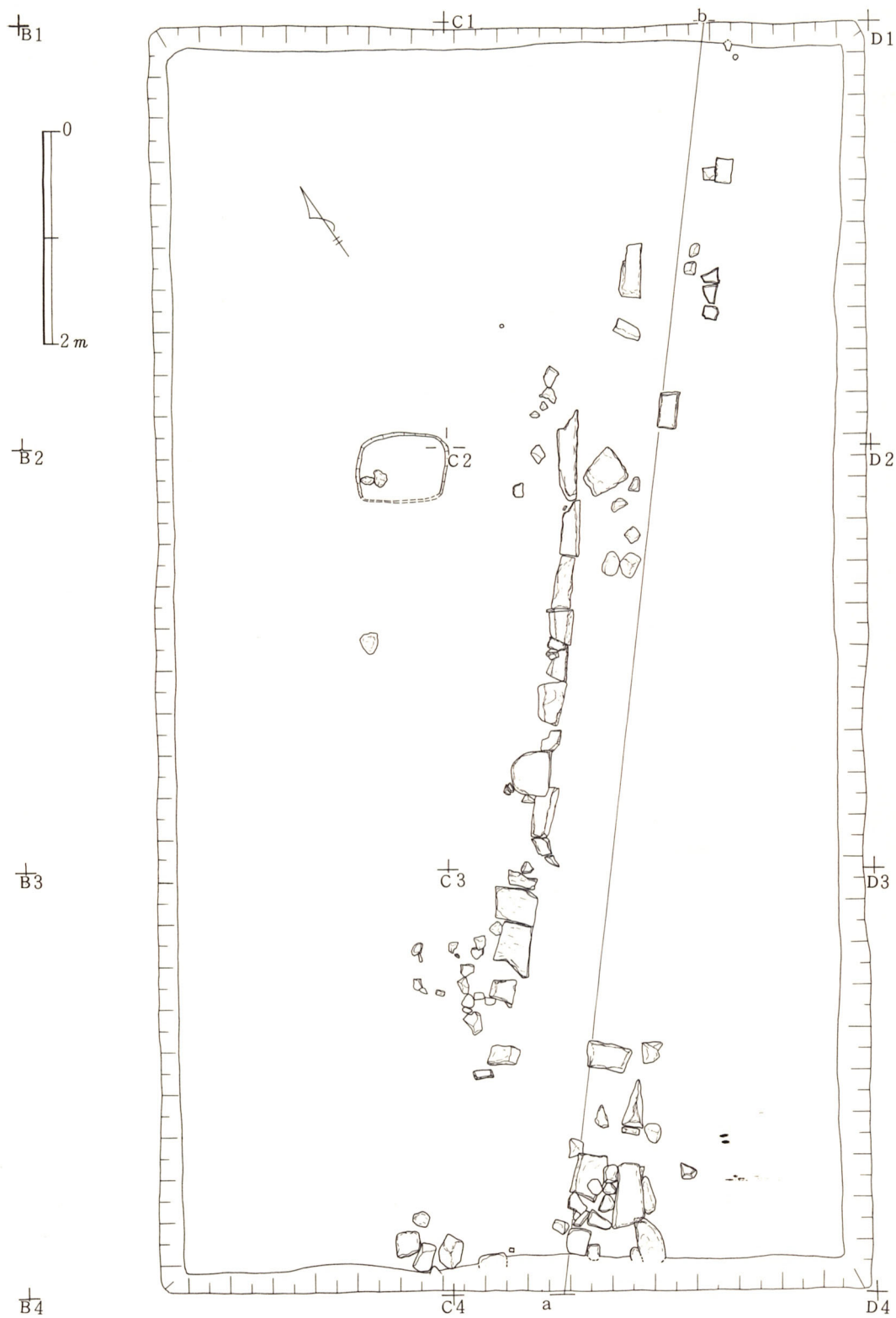


图7. 代官所南地区遺構実測図 (1/60)

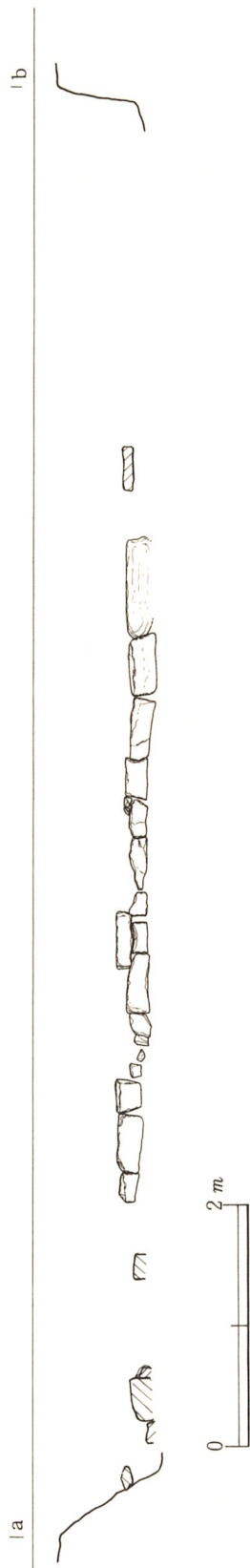


图8. 石列正面实测图 (1/60)

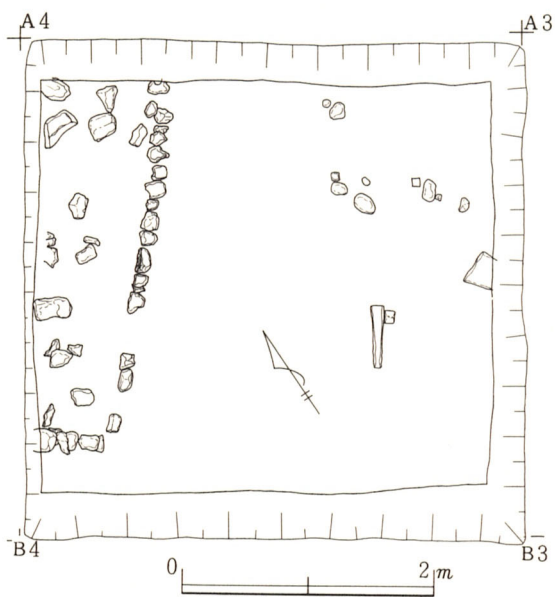


图9. 代官所南地区石列实测图 (1/60)

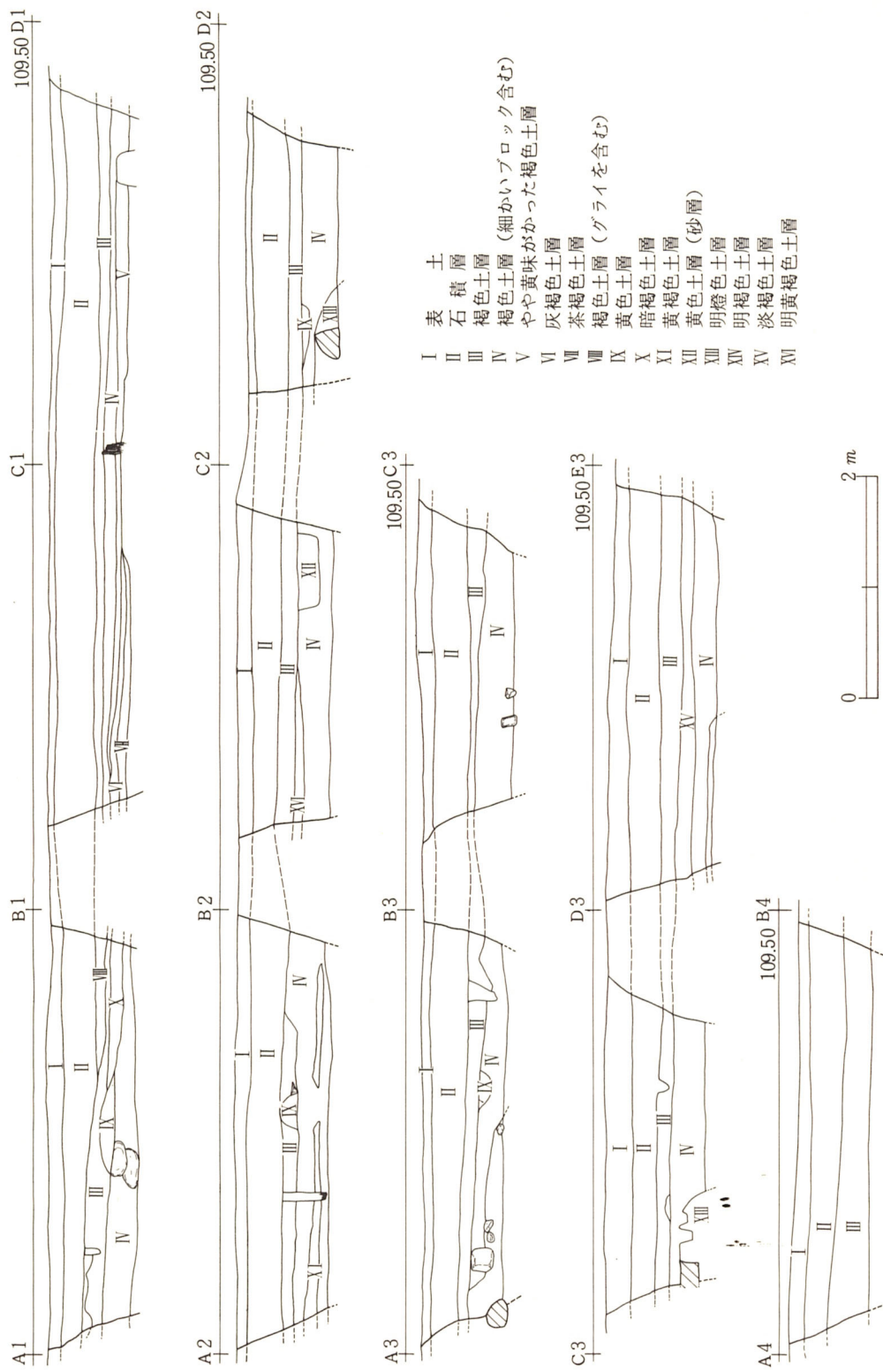


図10. 代官所南地区土層図(1) (1/60)

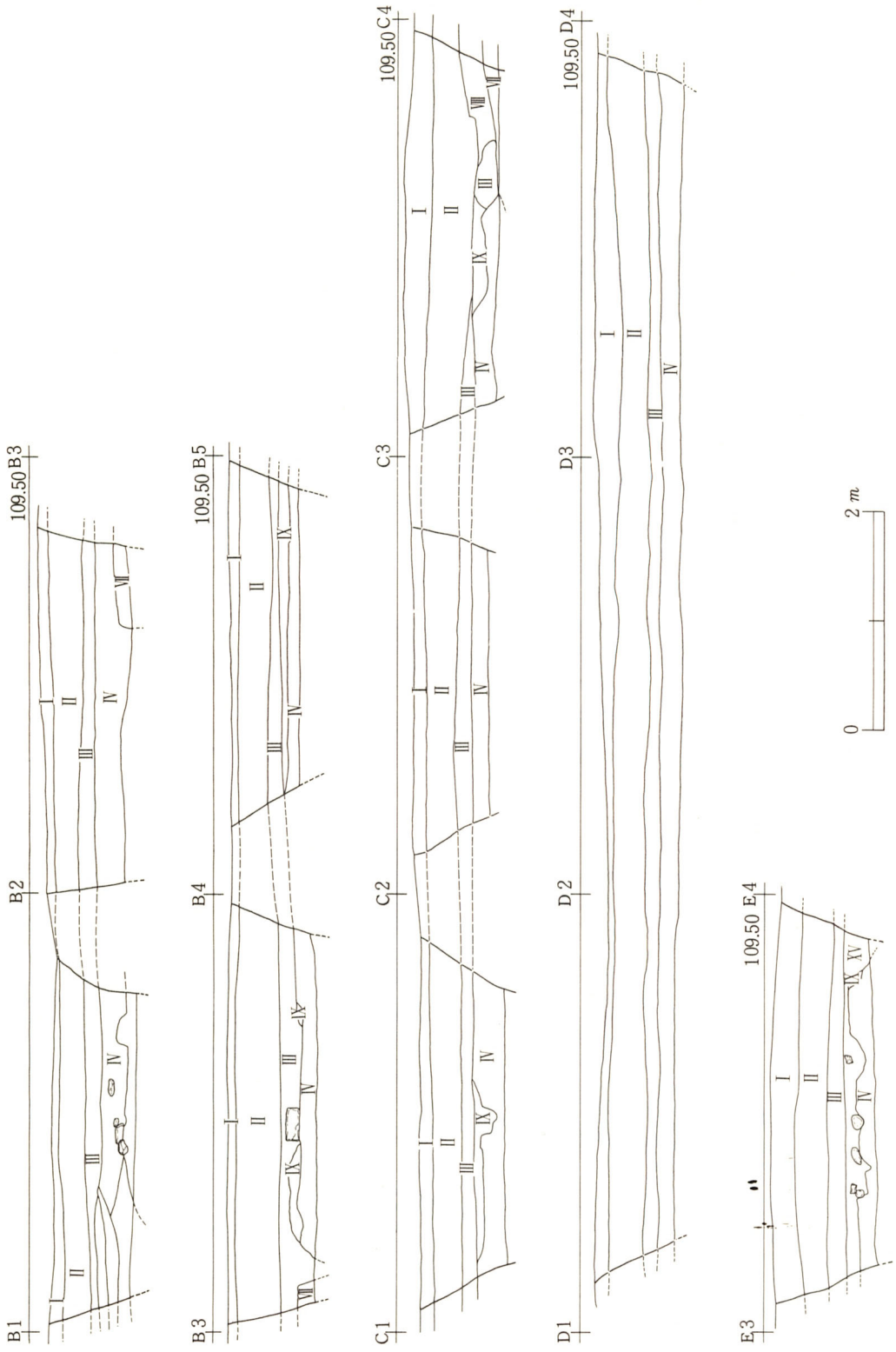


图 11. 代官所南地区土层图(2) (1/60)



图 12. 公園地区地形測量図 (1/1,000)

IV 出土遺物

1. 番所跡地区

この地点の遺物は後代のものも多いが、16～17世紀の遺物も30数点確認される。その大部分は陶磁器で、他ではB7区から鉄匏玉が1個採集されている。

C8区からは16世紀後半代の青磁暗花文皿・白磁青花鳥文碗の他に、17世紀初頭の白磁青花小皿・白磁青花皿（呉須手）・唐津焼碗が出土した。

C6区からは備前焼の甕、B8区からは備前焼の壺と唐津焼の皿が出土した。

B7区からは16世紀末から17世紀初頭の備前焼壺類片・白磁青花皿・絵唐津碗及び17世紀初頭の唐津焼皿・唐津焼小碗・唐津焼皿・白磁青花皿（呉須手）等が出土している。

B6区からは15世紀代の青磁碗が出土していて注意される。器肉の厚い無文のもので、口縁部が外反する形式のものである。

他の資料は備前焼の甕を除きいずれも17世紀以降に下るもので、唐津焼皿・唐津焼大皿・伊万里の釉生掛けの皿・伊万里皿と透明釉で小貫入が全面に入った碗などが出土している。

B5区からは16世紀後半の白磁青花碗及び17世紀初頭にかかる唐津焼大皿が出土している。

A3区からは17世紀初頭と考えられる砂

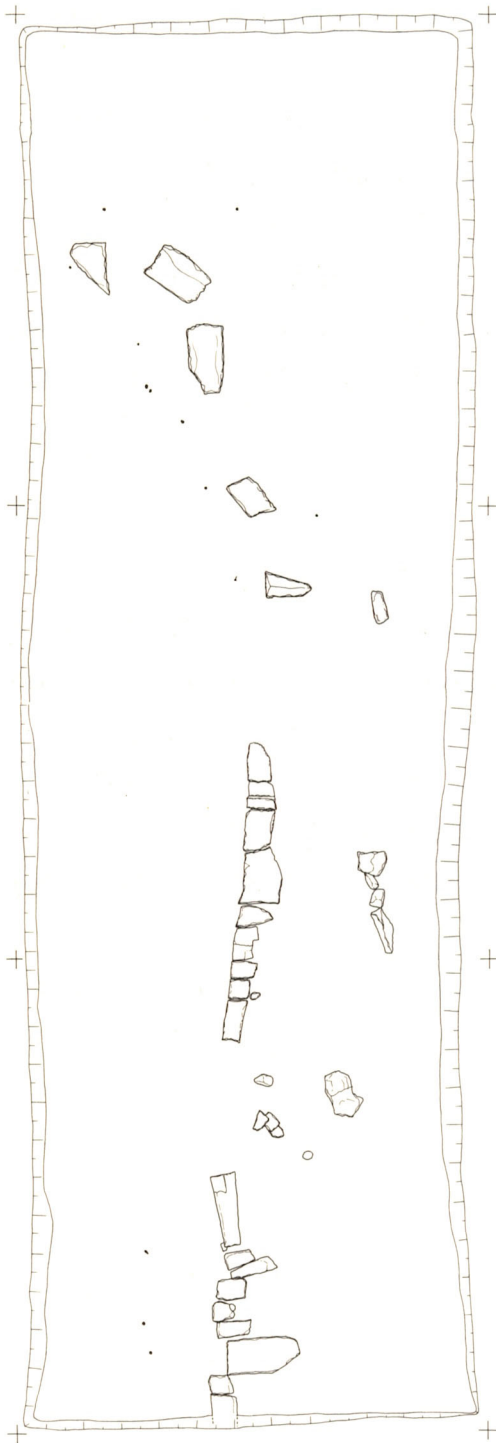


図13. 公園地区石列実測図(1/80)

目跡をもつ唐津焼皿2点と備前焼壺が出土している。

その他の地点から底裏に「保」他の銘を持つ白磁青花皿・唐津焼皿・備前壺・唐津系の皿が出土している。

もちろん17世紀以降の資料も出土しているわけであるが、この地点における建物なり、生活の様相をうかがい知る資料として、以上陶磁器はその開始期を語るものとして差し支えなかろう。

15世紀代の青磁碗の存在には留意しなくてはなるまいが、備前焼や中国製白磁青花及び唐津焼や主体となる出土陶磁のセットは当該地域のこれまでの研究成果より見て、16世紀末葉から17世紀初頭に位置づけられるものであり、番所跡地区の性格を論ずる場合参考になろう。

2. 代官所南地区

この地点の遺物は陶器と磁器があって、それはすべて国産品である。

陶器の内には江戸時代初頭の所産になると考えられる唐津焼の皿が2個体分含まれている。直角気味に外反する口縁部の口唇は内側に条溝を有しており、見込みには砂の目跡が残っている。同じことは巾広い畳付をもつ高台にも言え、白濁した釉は一部高台内にも被けられている。他の1点は鉄分を含むややねっとりした胎土のもので、縁灰色の釉が高台脇まで被っている。三日月形の高台の一部に粗い砂粒の目跡が附着している。

この2点以外の陶器は産地は判然としないが、いずれにしても近隣地域で焼成したと考えられる江戸末期以降のものである。

磁器は肥前系統のものが大部分であると考えられる。一部18世紀頃の資料も散見されるが明治以降のものも多い。

(村上 勇)



代官所南地区石列（南西から）



代官所南地区（北西から）



代官所南地区石列（部分・南東から）



代官所南地区石列（部分・南から）



代官所南地区土城検出状況（南西から）



代官所南地区A 3区遺構（南東から）



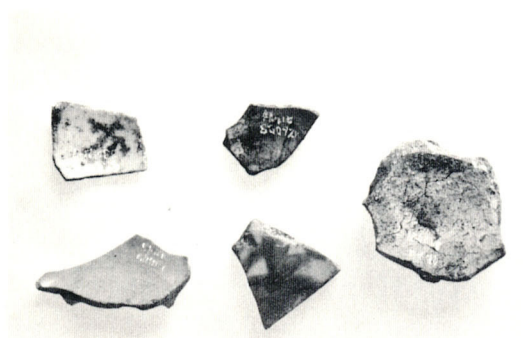
代官所南地区遺物出土状況 (1)



代官所南地区遺物出土状況 (2)



公園地区 石列 (西から)



(内面)



(外面)

番所跡地区 C 8区出土遺物



(内面)



(外面)

番所跡地区 B 7区出土遺物



(内面)



(外面)

番所跡地区 B 6区出土遺物



(内面)



(外面)

番所跡地区 A3区出土遺物



(内面)

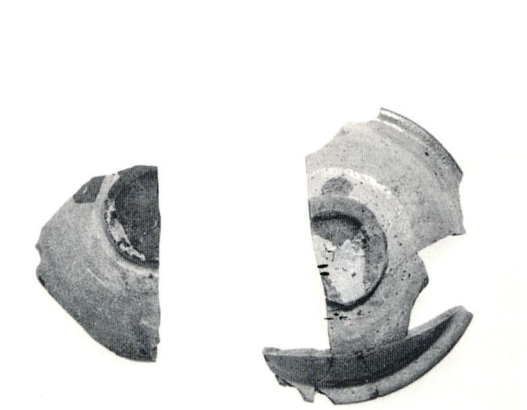


(外面)

番所跡地区出土遺物 (表採他)



(内面)



(外面)

代官所南地区出土遺物

大田市埋蔵文化財調査報告 5

石見銀山遺跡発掘調査概要 1

1984年3月

島根県大田市教育委員会

(島根県大田市大田町大田口1111番地)

